
ライフスクール

タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライフスクール

【Nコード】

N4344C

【作者名】

タカ

【あらすじ】

ライフライブシリーズ第二弾。暢気に新しい日常を楽しんでいた俺。だが俺とは全く関係ない自殺事件が俺を少しずつ大きく巻き込んでいく。美人才タク弁護士ご一行と超一般男子高校生のコミカル&シリアス推理小説。

プロローグ「皆」(前書き)

ある友達が素直に面白いと言ってくれましたので、続編を作りました。毎度のごとく、誤字、脱字のオンパレードですが、しっかり見直して書いていくつもりです。

あと物語の感想も書いてくれたら嬉しいものです。

ブローグ〜「皆」〜

俺の変わらない日常は少しずつ変化していった。

2006年5月。去年ならのんびり家族とゴールデンウィークをエンジョイしている俺がいたが、今年は違う。

今。俺は今年のゴールデンウィークを夜井法律事務所という名前はたいそう立派だが中身がめっちゃめっちゃおかしいところでバイトしている。

まずこの事務所の社長は夜井姫菜。職業は弁護士で「模範の女弁護士」という普通すぎる異名を持つ女性だが、この人にはある顔がある。そう。いわゆるオタクってやつだ。この事務所の至るところにはゲーム・マンガ・フィギュア・ゲームが散らばっていて、最初、俺が訪れた時はここが弁護士事務所とは思えない場所だった。本棚の奥にあった六法全書が埃をかぶっていて、この人ホント弁護士なのかと思うほどだ。

年は25歳。

今は夕方なのにパジャマ姿で長い黒のロングヘアをポニーテールにしてゴロゴロと美少女が踊りまくってるアニメをウキウキしながら見てやがる。

「夜井さん！一緒に片付け下さいよ！」と俺はこの風変わりな弁護士に言った。

「ええ〜？あのね、その『部屋を綺麗に片付ける』って仕事はあなたの仕事よ。雑用は雑用らしくしなきゃ。ね？」と男を誘惑する専用の目で言ってきたやつだ。一般男性ならあらゆる意味でイチコ口だろうな。けど俺はこの人の対策を約一ヶ月ですっかりと身につ

けていた。

「普通のゴミを片付けるのはいいとして、まずこの美少女アニメポスターとかこういう破廉恥なパソコンゲームは自分でなんとかしてください！あとポスターも！！あなたは女性です！女性らしく生きてくださいよ！！そもそもゴールデンウィーク中に事務所を片付けちゃいましょって言ったのは夜井さんですよ！！」

「はじめぐぐ。それは男女差別よ。しつかり訂正しなさい。それに片付けは年末にするべきだったわ。この夜井姫菜。一生の不覚ね・・。」

なにが一生の不覚だよ。あんたのオタク趣味の方が間違ってると思うのは俺だけなのか？

「訂正しますからとりあえず、テレビを消してこれらを片付けてください！」

「あの・・・夕飯できましたけど??」

と桃原空菜がキッチンから現れた。

彼女は4月のある事件に巻き込まれた美少女高校生だ。17歳。髪は今、ツインテールで少し染めて茶髪だ。体格も華奢で、誰もが認める美人。性格も穏やかで、人望も厚い。転入生というポジションでもありながら俺のクラスの男女のハートをしつかりキャッチしてしまった。

俺が今、彼女の横にいることを気に入らない反抗分子も出来ていらしい。まあ噂だが。

思えばあの事件の頃と比べると別人のようだ。

ちなみに彼女は親戚も誰もおらず、身元引受人に困っていたところ、夜井さんが「私が引き受けるわ！」などと言ったらしく、親代わりを務めている。

彼女はこの事務所の四階に住んでいる。

それと料理が非常に上手で、この事務所の料理担当として抜擢されていて彼女の新しい生きる道としては最適な環境となっている。俺

はそう思うとすごい嬉しかった。

「今日は何??」と夜井さん。

「カレーです。いろいろと工夫したんで、味は大丈夫だと思います。はじめ片付けは食べてからにしよう?」と綺麗な笑顔。

「う、うん、わかった。空の顔に免じて一時休戦っすよ。」

夜井さん対策は身に付いたけど、空にはまだ対策というべきかなんというか、照れてしまう自分があるな……。ちなみに空ってのは俺が桃原を呼ぶときの呼称だ。そうよばないと絶交するという悪魔の契約を不可抗力で交わされているためだと理解してほしい。

あとはじつてのは俺のことらしい。『はじ』か……。はじなんて呼ぶのは彼女くらいだ。

「分かった。分かったわよ。片付けるわよ。はじめって案外我が儘よね。空菜ちゃん??」

「……えつ……えつと……」

「空を困らせる事言わないでくださいよ!それに我がままなのは夜井さんでしょ??」

「良い匂いですね。カレーですか??」

と間のいいところに王間さんが事務所に入ってきた。

この人は王間冬美。二十歳の現役大学生。ショートヘアで毛系のニットを常に被っている。背は小さく、眼鏡をかけている。眼鏡っ子ってやつかな?この人もなかなかの美人であるが、あまり感情起伏が少ない人だ。ノートパソコンを常にもち歩いている印象がある。しかもこの人、なんと凄腕のハツカーでこの事務所では情報管理及び夜井さんの秘書としてここで働いている。今日は原宿を歩いてそのうなカジュアルなファッションだな。

この人はこのビルの三階に住んでいる。つまりこの事務所の上だ。

後で知った事だが、このビルは夜井さんが土地ごと買いとつたらしい。このご時世によくもそんなお金があるな……。

「桃原さんの料理はいつも美味しいですから楽しみにしてしまいます。」と無表情で言う。

夜井さん曰く彼女の話している事はちゃんと本心で、表情に出すのが苦手なためいつも無表情だからと言うことらしい。まあそこが王間さんらしいけど。

「それで皆さんのこのゴールデンウィークのワークスケジュールをプリントにまとめたで、目を通して下さい。」

渡されたプリントには細かく仕事内容が書かれていた。あとで見よう……。まずはこの空シェフの天下一品料理を味わってからだ。

「ただいま〜！腹減っちゃまって女の子ナンパする場合じゃあなくなっちゃったよ」

この乱れた日本語で話す人は神原進士。185という長身で体格は比較的華奢。超美形で、髪は銀髪。新宿を制すホストみたいな顔の人だ。この人はこの事務所の調査専門人謙ボディガードらしい。探偵といえば簡単だが、本人が言うには探偵じゃないそうだ。メインはボディガード。彼はあらゆる格闘技をマスターしていて、体格のわりに筋肉がやばい。まさにイケメンってやつだ。この人はこの事務所には住んでいない。ならどこに？と聞かれても神原さんは誰にも言わないと決めているらしい。この人には少し謎があるな。

「おつす！！夜井さん。空ちゃん！はじめ！……それにえつと王間さん。」

最近分かった事だが、神原さんは王間さんが苦手らしい。「それ以外ならオールオツケーだけど俺より年下はガキだから眼中にない！」と俺に熱く宣言してくれたことがあったな。まあ性格は兄貴分

だから、良い方だけど、かなりのナルシストだからなあ……………。

「ほら、カレー冷めちゃうわ。みんなで食べましよう??」

みんなでカレーを食べる。そのものの行為は普通だが、俺はこの時間が楽しかった。

この時がずっと続いて俺は悔いはないね。あの頃に比べたら誰もがそう思うだろう。

高校一年の時の俺はまるで抜け殻みたいだった。

この表現は間違いではなく、まさに文字通り。何にも面白味を感じられなかったのだ。

それを苦しいとも感じられず、ただ時間が過ぎるの待っていた俺。

俺? 所謂いえば俺の名前は荒波 一。ここでは雑用としてバイトしている。何故こんなところにバイトしているのかは……………説明が面倒なので省略する。要するに楽しいからここにいたいだけだ。ここに居る皆みたいにある特技も能力があれば嬉しいが残念な事に俺は普通の高校二年生だ。少し背がでかいくらいが特徴かな? まあこの長い人生だ。いずれは見つかると思いつつ、カレーを吟味した……………うん。めっちゃめっちゃうまい。

・ 昨夜、千葉の播北高校で男子生徒が自殺した事件で……………

と夕方のテレビのニュースでふとそう流れた。皆はカレーに夢中でニュースを気にしていなかった。当たり前だ。人ってのは自分に関

係ある事しか興味が湧かないものだ。

でも俺はまさかこの事件がこの五月に起こる、連続殺人事件に発展するものだとは思ってもいなかった。

第一章「ミステリー研究会」

5月8日。月曜日。朝。

俺は疲れきつた体と消沈した気分で学校に登校していた。

このゴールデンウィークはまさに掃除の嵐だった。片付けても片付けても終わらない無限地獄。しかもほとんど事務所に泊まりっぱなし。

俺の親が普通の親ならば、この事について何かと反論が出るだろうが、俺の親と夜井さんはちゃっかり意気投合してしまい、親公認のアルバイトになってしまった。せめてお金をもらっていれば文句はないが、4月の事件でかかった費用分、仕事をすると夜井さんに言われてしまい、きつちりバイトをしている。つまり一銭も貰ってはいない。

・・・はあ。辛いな。まったく。

だが苦しい事があれば、嬉しい事もあるようだ。

俺の隣にはウチの制服を着た桃原空菜がいる。ウチの学校の制服は藍色を強調していて男子のブレザーと女子のスカートがその色だ。

よくある制服と言ってもおかしくない。デザインも普通すぎるからな。ただ着ている人によって制服ってのは悪魔と天使になるらしい。俺の隣にいるのは天使と言っても過言ではない。

「学校って楽しいよね？」と空が突然話題を提供してきた。

「まあね。空はめっちゃくちゃダチ出来たから楽しいしょ？」

「うん！」と美の女神如くの笑顔を俺に向けた。と意味のない会話をしているのが俺と空の会話だ。だが俺にとっては楽しいもた。

ただ空は、『あれ』さえ治せば完璧なんだけどな・・・

「なあ、聞いたか??例の自殺事件?ニュースでやってたよな?」

「そうそう、こえーよな。自殺なんてなんでしたんだろう?」

「いやよ……。だって……」

「この学校の近所で……」
など

俺と空と一緒に教室に入ってみると、例の自殺事件がクラスの話題だった。俺は全く誰が自殺したのも、何故ここまで話題に持ち上げるかも、わかりもしない。

「おは！はじめ、ももちゃん！二人で登校とはラブラブモード全開だなあ！！」と俺の友達の勝間が話しかけてきた。

「うるせえ。ちょうど登校時間が一緒なだけだよ。」

「そうだっけ？だってわた……」と私の家で泊まって一緒にここまで登校してきたんだよと間違いいはないが、大きく勘違いされる台詞を全力で俺は空の口を塞いで全力で止めた。

説明をもう一つ。この無邪気な美少女高校生はかなりの天然である。初対面の時はそのようなオーラは一切なかったが、今じゃこうだ。言わなくてもいいことをポンポンと言ってしまふ。なかなかの困り者だ。いつからこうなってしまったのだろうか……。これも夜井さんの影響か？

「分かった。分かった。どうせ聞いても教えてくれないだろう??
そういえば二人は例の事件知ってるか??」

「ああ……。えっとニューズでやってたやつ?それがどうしたんだよ?」

「いやウチの学校からめっちゃ近いじゃん!」

「駅でいう二駅ぐらいの距離だぜ?何を大きく話題にしてんだよ?」

「それがよ。何でも噂だけど自殺じゃなくて殺人らしいぜ?」

「ふん」

「はあ!!何だよ!!お前のそのリアクション?!もっとびっくりしろよ!」

「びつくりしたくても噂じゃあ・・・」

「ももちゃんも驚きだよな?!」と話題を振る。

「えっと・・・スゴく恐いね!」と笑顔で突き返す。

「いいよ・・・。どうせ俺は妄想族ですよ」と少し涙目になって嘆き始めた。

・・・へこみやがったよ。まあ誰かの被害妄想が生み出した噂だろうな。と思いつつ、いつも通りの学校生活が始まった。

正直言うが、この時、俺は少しこの自殺事件を気になりだしてはいた。ただ、余計な事に首を突っ込むと痛い目を見るのは自分と理解している。もう二度と危ない目に遭うのはごめんだね。

だがそう簡単に俺を逃してはくれなかったようだ。運命ってやつは。

放課後。つまらない授業を終えて解放感を味わっている俺にある思いがけない人物が俺に話しかけてきた。

「・・・あの少しお話をしたいんですけど・・・」

俺に話しかけてきたのは同じクラスの上木真央。女子であり目立たない方のやつだ。今初めて話しかけられたため、特徴が述べにくいな・・・。背が小さく大人しいタイプというしかないな。

「お、俺?何で?」

「お願いします。大事な話があるんで・・・」上木は小さい声で話す。なんだろう、大事な話って。

「どうしたの?」と今度は空が俺に話しかけてきた

「もしかして告白されてるの？」
と真面目な顔で言いやがった。ちよつと待て。こんなまだ授業終わって間もない時に告白なんてローマ法王でもやらないぞ。
「・・・違います。少しいてきてくれませんか？」
と恥ずかしながら上木は言った。

連れてこられたのはウチの学校の別館にある文化芸棟。教室がある教室棟にある棟で、文化系の部活が活動するための教室がある場所だ。さすが私立というべきか。
ついでに空もついてきた。

「空は先に帰ってもいいよ」

「ダメだよ。ねえさんにしっかり見張つとけって言われるから」

「何で？」

「バイトから逃げないようにって」

・・・俺は信用されてないのかよ。悲しいな。

「ここです。」

そこは文化芸棟四階の一番端にある教室だ。入ってみるとそこには見知らぬ人物が二人いた。

メガネをかけて、いかにも生徒会長のような風格の男が椅子に座り、じつと見ている。

その横に短髪の女子。どうやら体育会系だろ。雰囲気がそんな感じだし。

「こんにちは。いや、はじめましてかな。君の事はちよくちよく耳

にしているよ。」

何をだよ。コイツ、嫌なやつオーラがプンプンするな。

「・・・えっと、何つまりか？」

「ごめん。先に自己紹介するよ。私の名前は石山賢二。君と同じ学年でクラスは1組だ。以後よろしく。早速だが本題だ。実は我がミステリー研究会に入って・・・」

「やだ」

俺ははつきりと拒否した。それと同時に上木を見る。コイツ、何で俺をミステリー研究会なんぞに・・・。てかそれだけのために・・・。少しガツクリだ。

「まあ、予想通りの反応だな。さすが荒波君。」

なんだ？こいつ・・・。名前なんか教えてないぞ。気持ちわるいな。「用がそれなら帰る。一応俺バイトしてるし、時間ないってのは妥当な理由だよな？いきなり連れてこられて入会なんて、宗教勧誘と同じ手口じゃねえか。帰ろうぜ、空。」

「え、いいの??面白そうなの?」と空が何も分からない顔で答える。

「当たり前だろ?ほら、帰ろうぜ。」「こんな気味の悪い部活なんぞ入ってたまるか。」

「例の自殺は自殺じゃない。」

コイツも噂を丸呑みしてるのかと思う。だが次の言葉に俺を驚かさされた。

「明日、私たちの学校で人が殺される。自殺と見せかけてな。」

俺は教室から出ようとしていた体をこの石山に向ける。そして俺はコイツを睨みつける。

コイツは何を言ってるやがる。

「もし、この部に興味が湧いたら、明日の放課後、学校の正門に私達はいる。おそらく学校には入れなくなるからな。」と石山はにやりと笑う。

俺はそんな頓珍漢な言葉を無言で返し、空を連れて、その最悪な場所から出る事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344c/>

ライフスクール

2010年12月3日14時13分発行